

藤田浩子の 少し昔のこと 〈108〉

せっちん
雪隠（便所）と昔話

東北ではよく便所で亡くなるお年寄りがいました。きびしい労働で塩分を多く摂っていて血圧が高い人も多く、急に寒い所には行ってしゃがんでいきむからだと言われていました。そのせいでしょうか、水洗便所は広まるのが早かったような気がします。

今の家でトイレは家のまん中にあります。換気扇もついていますから、家の端にしたり外便所にしたりする必要がないのです。ウジ虫のうようよしていた便所、冷たい風が吹き込んでくる便所がなくなり、昔話も消えてしまいそうなので、ここに書いておきます。



『ウジ虫の天気予報』 婆様が雪隠（便所）でしゃがんだらば、ウジ虫が言ったと「上が暗くなったから雨が降って来るぞ」シャー「ほらな」婆様がおならをしたと「雷鳴ったから落ちてくるぞ」ポトンポトン「ほらな」

『近道』 爺様が雪隠に隠れてぼたもちを食うべとしたらば、下に落ちてしまった「おのれ、近道しおったな」（本来なら爺様の腹を通して明日いく筈の所）とごしゃいたと。

『河童の尻なで』 若い娘が雪隠でしゃがむと、河童が冷たい手で尻をなでるんだと。婆様が包丁を懐さ入れてしゃがんだけんどなかなかでねえ。河童もとうとうあきらめて婆様の尻に手を伸ばしたらば、ざくっと腕を切られてしまった。その晩河童が謝りに来て腕を返してもらい、河童の軟膏をくれた。それをもとに薬屋を始め、婆様は儲けたと。

『5升の白飯』 お客が来たときだけ白米を炊くことにしている和尚、指の数で炊く量を小僧と約束している。客が来てあわてて雪隠さ入った和尚、下に落ちてしまった。小僧は和尚の悲鳴を聞きつけてあわてて雪隠さ行って覗いてみたらば、和尚が手を広げて助けを求めている。小僧は和尚を助けもせず、あわてて5升の飯を炊いたと。

リレー連載 <238>

わたしの大好きな絵本

稗田(どんぐりころころ)

おふとんさんはクーちゃんが生まれる前からおばあちゃんのお家にいるおふとんです。

おばあちゃんの家初めて1人でお泊まりにやってきたクーちゃん。昼間は楽しく過ごしていたクーちゃんですが、夜になると心細くなってしまいます。「夜中にトイレに行きたくなったらどうしよう。」「オバケが出たらどうしよう。」と、次々と怖いことが浮かんできます。そこでおふとんさんがかける言葉が本当に暖かなおふとんのようなのです。どんな時もそばにいてくれる、包んで、抱っこしていてくれると言うのです。どんな夜でも朝

『おふとんさんとねむれないよる』

作・絵 コンドウアキ

出版社 小学館

が来る。それまでずっと一緒にいるよ、と。

オバケをパンチでやっつけてくれるヒーローも良いけれど、ただただ寄り添ってくれる存在も素敵だな、欲しいなと思うのです。

この絵本を読む度に、私も息子たちにとっておふとんさんみたいになれないかしらと憧れてしまいます。

